大正新脩大藏經索隱第一卷阿含部

大藏出版株式會社編輯部編纂

昭和十五年六月二十七日　大藏出版株式會社發行

四六倍判六〇七頁　非賣品

話は少し古いやうであるが、昭和十五年六月に發行された大正藏經の索隱第一卷、阿含部を批評紹介して見たいと思ふ。

人も知る如く、大正藏經の內容は、量質共に世界に冠たる大出版であつて、其の編輯の苦心と佛敎學界に貢獻する偉大な功績とは、容易に述べ盡すことは出來ないものであるが、更にそ

の內容を一々讀みこなして克服してゆくといふことは難行中の難行とせられてゐるのである。こゝに於いて、之が索引編纂の必要は、各方面から要求せられ、曩には川上孤山氏に依つて縮册大藏經に依り大藏經索引が編纂せられたが、それは折角の努力にも拘はらず使用に堪へないものとして顧みられず、更に優秀な索引の編纂が、時代に卽して生れた大正藏經の立派なテキストを定本として生れてくることが期待せられたのであつた。今囘大藏出版から出た索隱は、さういふ意味に於いて、全く生るべくして生れ出で得なかつたものが、更にその藏經の出版元の人々の一大決心に依つて漸く生れ出たものであつて、その點この索隱の出版に盡力せられた發起人の一大勇猛心と、編纂者各位の隱れたる大努力とに對しては滿腔の敬意と謝辭とを呈するものである。

大正藏經は正編と續編と圖像部の三部に分れてゐるが、その中索隱はとりあへず正編五十五卷二十四部門に亘つて編纂されるものである。これは實に我が國では曾て見ない尨大な索隱である。今そのできた第一卷阿含部の索引を手にして見るに、本書は四六倍判八ポ活字の三段組み六百七頁といふ、索引としては稀有の素晴らしい大きさをもつてゐるものである。その內容は項目索隱、音次索隱、字劃索隱の三部に分れてゐる。項目索隱は更にこれを世界、諸法、惡業以下の六十四項目に分類され、索引の題目の性質に依つて、適當なる分類項目中に攝入してゐる。音次索隱は吳音に依る五十音順に、字劃索隱は康熙辭典に依り、劃數の小なるものから大なるものに及ぼしたものである。

さて本書を手にして考へさせられることは、本書が如何なる編纂態度で、如何なる方法で、如何なる形式を用ゐて編纂されたかといふことであるが、その大體は凡例に詳しく說明してあり、その題目の採り方は各部門に亘つて夫々の專門家に依囑しその專門家の引いた橫線に從つて忠實に題目を集めたものとされてゐる。元來索引は又索隱とも書き、英語の Index の譯と考へられ、バイブル等では Index の外に Concordance といふ言葉を使用してゐる。之は强ひて譯せば要語索引の意味である。更に支那では今現に Index を音譯且つ義釋した引得なる言葉が盛んに用ゐられてをり、通檢、檢目、便檢、韻府、韻編の如きも一種の索引とも見ることができる。索引はその精密の度合に依つて、完全索引、理想索引、便利索引の三種に分けて考へることができる。完全索引とは、最近支那に於いて萬國圖書館協會協定の decimal system を應用しテキストの文字を縱と橫との桝目を組合せて文字を拾ひ出す、東洋式な最も完全な索引編纂の方式を採用して作つた索引の如きものである。然るにこの方法は、文字の落ちはない代り、屢々冗長に流れ、使用に不便を來し易い。これに對して便利索引は、自分に必要な題目のみ集めればよいから、その點非常に便利であり、簡單であるが、其は又編者の個性に餘りに多く支配せられ、或は屢々不用意の脫落を來し、取返しのつかない結果を將來し、他人では使用できないものとなる恐れが多分に生じてくる。その中間を行くのが理想索引で、こゝではなるべく便利で、簡單で、落ちのない善い索引が要求されるのである。

今大正藏經のこの索引はこの理想索引を覘つたものと思はれる。

然るにこの理想索引は多分に便利索引の缺點と、完全索引の缺點とを逃れることのできない性質を含んでゐる。そしてそれは屢〻使用者に失望を與へたり、或はその索引の價値を零評される結果にもなるものである。がこの點大正藏經の語彙の蒐め方は從來の索引に比較し、先づ〳〵及第點を與へてよからうと思ふ。けれども更に之を詳細に觀たならば、それは或は專門家に依囑して横線を引いて貰つたとはいへ、何となく語彙の蒐め方が平面的であつて、佛典の教義內容にまで頭を突込んだと思はれる立體的の感じが乏しいやうである。これはその索引が單に機械的に編纂されただけで、編纂者自身に、充分に索引に對する愛情がなかつたための證據と思はれるものである。

次にその蒐められた言葉の整理に就いて述ぶれば、これを項目索隱、音次索隱、字劃索隱の三形式を兼ね備へてゐることは今迄の索引にない英斷であり、名案である。併しこれをその三つの形式の中、どの形式を主にするかに就いては可成り議論のあつたことと思はれる。併し私が過去に於いて阿含經索引、支那佛教史索引その他の索引を蒐めた長い經驗から考へて見ると、それは使用者の便利を考へたならば、編纂者の個性を最もよく無くし、日本人として最も使用し易い音次索引を主にするのが最も適當ではなかつたかと思はれる。尤も大正藏經の索引でも、六十四部分の中は五十音順になつてゐるが、實はこれはその編纂方針の不統一を益〻暴露するやうなもので、使用者は反つて困ると思ふものである。其故私は今度の索引が項目索隱をその索引の根底としたことは、索引として最大の失敗であつたと思ふ。バイブルの索引では內容上の分類や、神學上から見た題目の檢出は辭典に讓つてゐるが、之は索引として當然であると思ふ。思ふに項目索隱の如きは使用者、研究者が各自に作るべきものであつて、索引編纂者の立入るべき領域ではないのである。其でも强ひて之を附け加へたいならば、それは當然字劃索隱と共に、音次索隱がすんだ後で附錄として附け加へて置いたならよかつたかと思ふ。

次に索引の內容に就いては、本索引はもとより文字を拾ひ出したものでもなく、又題目を設けて之に當てはまる語を拾ひ出したものでもない。それは主として語を拾ひ出す方法に力を入れてゐるが、語の外に文字や題目をも兼ねた便利索引でもあり要語索引でもあるわけである。その場合少くともその漢語に相當するパーリ語をできるだけ入れて貰ひたかつたと思ふ。これは甚だ無理な注文かとも思はれるが、さうすれば漢巴辭典をも兼ね、學界を裨益する所がより大であつたであらうと思ふ。又例へば信（Saddha）といふ言葉があれば、本索隱ではその中に五法、五種善法、七慧者法、八未曾有法をも分類して揭げてゐるが、これは信の部として出さずに、夫々一項目として獨立せしめ、信の部では三支、五根、五力、五事、五成法、五種善法、五法、七慧者法、八未曾有法中の信は夫々の項目を參照すべきことを斷つて、更にその斷りをもつと正確に精しく示しておくべきであつたと思ふ。又信についての例で言へば、信には更に信行、信者、正信、不信、清淨信等頻繁に出てくる熟語があるから、これも夫々獨立させ、信の項目の下では夫々此等の題目を參照すべきことを注意しておいた方がよかつたと思ふ。

以上の外注文を言つたならいくらでもある。今假りに大正藏

經の索引ならば、大正藏經の五十五卷は之を部門分けをせず、少くとも正編だけでもまとめたものとして、五十五卷通じた索引にして出して貰ひたかつた。又細かい點では、佛教の教學に重大な影響のある言葉は、或るものは内容からみて一まとめの題目を作り、或るものは之を分割し、上の文字でも下の文字でも引けるやうにしたならより完全に近かつたであらうと思ふ。併しこんな注文は列擧すればいくらでもあることであり、今は紙數の都合上之を割愛することとする。これに就いて考へられることは、從來兎角索引編纂といふことが勤物的勞働として卑しめられて來た傾きがあるが、私はこの際改めて學界にかゝる歪んだ考へ方を是正するやう要請したい。事實現在及び將來の學界を展望したならば、索引の果すべき役割が如何に重大であるかはその道の學者が最もよく知つてゐる筈である。然るに編纂されたる索引に就いて、最も恩惠に與りつゝ、最も理解の少いのが學者である。かゝる刻薄の情は兵卒の勞苦を知らぬ將軍の如く學者の恥を曝す以外の何ものでもない。この點私は一應大正藏經の索引編纂者に色々な注文はして見たが、其にも拘はらず索引そのものの價値や索引編纂者の努力に對しては充分なる推奬の辭と尊敬の念を惜しまないものである。實際今日の日本の學界、殊に佛教學界のあらゆる情勢から考へて、これだけの索引が出來上つたことは容易な努力ではない。又その出來上つた索引の出來榮えの如きも、尙ほ相當の注文はあるが、それでも尙は項目索隱、音次索隱、字劃索隱を具備し、充分利用し得られるものであつて、この點往年の大藏經索引とは全く面目を一新してゐるのである。私は本稿を終るに當り、殆んど狂氣に近いこの大事業に喰ひ下り乍ら離れずに索引編纂に從事してゐられる編纂委員の方々の並々ならぬ努力に感謝すると共に、その健在を祈つて止まないものである。

〔春日禮智〕